

ガンガンONLINE

コミカライズネーム構成大賞

異世界恋愛ジャンル課題用小説

『俺の悪女がかわいすぎる』

著：マチバリ

「悪女があんなにかわいいなんて俺は聞いていない」
「噂だけを信じて、追放された悪女を妻にとか言い出したアンタが悪い
んでしょうか」

頭を抱えるシオメンに向かって、宰相のアルバスが冷たい言葉をぶつ
けた。

「お前……仮にも主である国王に向かってなんという口の利き方だ」
シオメンは殺意を込めて睨み付けるが、当のアルバスは涼しい表情を
浮かべたままだ。

北の帝国、バルドー。

その若き主であるシオメンは熊さえ避けて通ると称される強さに加
え、容赦のない政策を執ることから周辺諸国から暴虐王と呼ばれている。

実際は、かつてこの国を支配していた腐った前政権を容赦なく排除し
ただけの、至って誠実な為政者なのだが、見た目のせいでそのような噂
が立ってしまっているだけだったりする。

だがその噂のおかげで周辺諸国から一目置かれているのも事実で、シ
オメンはあえて否定をせず今日まで来ていた。

幼馴染みであり右腕であるアルバスは、銀縁のメガネをくいっと押し
上げながら無遠慮な視線を向けてくる。

「それで、どうするおつもりですか？ 当初の目的通りに彼女を無理矢
理妻にして……」

「馬鹿を言え！」

拳で机を叩けば、真新しい天板が嫌な音を立てた。

「やめてください。ついこの間、新調したばかりなんですから」

「うるさい！！ とにかく、セレナ殿には離宮で静養を……」

軽やかなノックの音がシオメンの言葉を遮った。

そして返事を待たずに扉が開く。

「シオメン様、午後のお茶をお持ちしましたわ」

優しい香りと共に小柄な少女が室内に入ってきた。

まるで妖精と見紛うばかりに愛らしい彼女は、ふわりと微笑む。

「……セレナ殿。部屋で大人しくしてくれとあれほど」

「でもお部屋にいてもすることがなくて。私を助けてくださったシオメン様のお役に立ちたいんです！」

邪気の欠片も含まれていない笑顔にシオメンはうぐうと唸る。

隣にいたアルバスがメガネを押し上げた気がするが、視線を向ける勇氣もなかった。

数週間前。

山向こうの王国で建国記念のパーティーが開かれた。

その場でその国の王太子が、長く婚約関係であった伯爵令嬢に婚約破棄を言い渡したのだ。

なんでもその伯爵令嬢は王太子の婚約者である立場を笠に着て贅の限り尽くし、周囲を虐げていたのだとか。

極めつけにその王太子と懇意になった男爵令嬢を野盗に襲わせようとしたのだという。

婚約破棄された伯爵令嬢は、悪女として国を追放されることとなった。

噂を聞いたシオメンはなんと豪胆な女だと心から感心した。

悪事を行ったことそのものは許せないが、その気高さと強さはよし、と思えた。

(その娘、欲しい)

実はシオメンは以前から王国をどうにかして攻め落とそうと考えていた。

歴史ばかりが古く貴族が圧政を敷いている王国からの難民は、帝国にとっては頭の痛い問題だった。いっそ水源豊かな王国を手に入れば帝国の暮らしの安定にも繋がる、と。

伯爵令嬢を味方につけ内情を知れば、攻め落とすのは容易になる。

少々骨は折れるだろうが、悪女とはいえ女。

自分が躡ければよい妻になる可能性もある。

もし矯正ができなければ適当な理由をつけて離宮に閉じ込めておけばいい。

追放されて野垂れ死ぬよりはマシだろう、と当時考えた自分をシオメンは殴りたいと思っている。

部下に命じ、追放された伯爵令嬢を帝国に連れてこさせたところまではよかった。

麻袋の中から転がり出てきたのは、噂で聞いた悪女とは全く別——むしろ真逆の清廉な美少女、セレナだったのだ。

「シオメン様は私の恩人ですわ。私、何でもいたします！」

「若い乙女が何でもなど言うな！！」

叫ぶように叱り飛ばせば、セレナがしゅんと眉を下げる。

かわいそうなその姿に心がぎゅっと痛んだ。

「陛下」

アルバスまでも咎めるような声をかけてくる。

（俺が悪いのか、俺が！）

「……セレナ殿。俺はあなたに何かしてほしいとは思わない。どうか、祖国で受けた傷を癒やし、これからの行く末をゆっくり考えてくれれば……」

「いいえ。あらぬ罪を着せられ殺されそうになっていた私を助けてくださったシオメン様に尽くすことが私の余生の使い道ですから、遠慮なさらず使ってください」

「ああ……」

思わず両手で顔を覆い、シオメンは情けない声を上げた。

そう。セレナは悪女などではなかった。

それらは全て、王国が作り上げた虚像だったのだ。

王国は随分前から貴族の享樂のせいで腐敗し、国民からの不満が溜まっていた。

その不満の矛先を向けるために「悪女セレナ」という存在を用意した

のだった。

彼女の悪事は全て嘘。

むしろ散財三昧の我儘王太子を必死に諫め、代わりに公務を行い、健気に国を支えていた忠臣だったのだ。

追放された彼女は真実を葬るために、殺されかけていた。

それを救ったのはシオメンが送ったセレナを誘拐するための刺客という皮肉さ。

セレナはシオメンを恩人だと信じ切り「何でもする」と言ってくるし、真実を知ったセレナの生家はシオメンに忠誠を誓い王国の機密をじゃんじゃん流してくる。

確かに望み通りではある。

だが。

「シオメン様。私のことは便利な道具と思い、使い倒してくださいね」
「だから、お前なあ……」

かわいい顔でとんでもないことを告げてくるセレナに、シオメンは泣きたくなった。

(くそう、俺の馬鹿者)

はじめて顔を合せたあの日、セレナはシオメンをみて優しく微笑んだのだ。

あらゆる女性から恐怖の眼差ししか向けられたことがなかったシオメンは、当然堕ちた。

愛を囁けばよかったのに、咄嗟に出た言葉は「今日から俺の為に働け」という最悪な言葉で。

「私、頑張ってます」

生まれてはじめての恋なのに、自分のせいで何もはじめられない。

武力も権力も恋心の前では無力なのだと思いますが、シオメンは悲しげなうめき声を上げたのだった。